

——待つて！ 待つてくれよ、サキ！

叫びたいのにことばが出ない。仁王立ちしているサキのむこうにある廊下の手すりの欄干が、サキの身体を透かして見えはじめている。

やつぱり自分はどんでもない思い違いをしていたのだ。サキは隣りに住んでいる子だと勝手に思いこんでいたが、サキが隣室に入りする姿を自分は一度でも見たことがあつただろうか。

やつとすべてを理解した。激しい涙の渦が身体の底のほうからつきあけてきたが、今は考えている眼も泣いている眼もなかつた。

行雄は靴下のまま表に飛び出し、隣室のドアをノックせずにつぶやいていた。鍵はかかっていなかつた。

腐った食物を連想させる臭気が、むん、と鼻をついた。それは腐った日常そのものの臭いだった。部屋の中は想像を絶するほどの乱れようで、台所の流しの中では汚れた食器や食べかけたインスタント食品がごちゃごちと山を作つており、そのはしづにはウジらしきものが蠢いている。部屋のそこここで割れた食器の破片がそのまま放り出されており、パンティと一緒に脱ぎ捨てられたストッキング、丸めたティッシュ、読み捨てられた女性週刊誌、吸盤の詰まつたビールの空き缶などで畳の上は足の踏み場もないほどだ。

耳をすませていないと聞き取れない赤ん坊の泣き声を追つて、行雄は散らかりくるつた

その部屋の中を注意深く歩いた。半間の押し入れの襖に耳をあててから、勢いよくそれを開いた。

カビの生えた薄べつたい布団の上に、アキはいた。一見しただけではすぐに人間の赤ん坊とは判らないほど痩せこけて、裸のままの身体のあちこちには煙草の火を押しあてた跡や青アザが無数にあつた。肋骨が数えられるほどに浮き出て、四肢も変なふうに内側に曲がっている。

それでもアキは、泣いていた。生きさせてくれと訴えるように、か細く弱い声で、しかし懸命に泣いていた。

激しい尿の臭いがしたが、行雄は構わずアキを抱きあげた。Tシャツの上に羽織っていた綿シャツをとつさに脱いでアキの身体をそれで包み、シャツごと胸に抱くと走り出した。アキの身体は嘘のように軽く、壊えていた涙があふれ出た。しまいには行雄の泣き声のほうがアキの泣き声よりずっと大きくなつていて、行雄はしつかりと赤ん坊を抱きしめて、雨の中を靴下のまままで大家夫妻の家まで走つた。

アキはすぐに救急車で運ばれていた。やがて警察がやって来た。

「もうひとりいるんです！ もうひとり！」

その場で事情聴取された行雄は泣ながら必死で訴えたが、あまりの惨事を目のあたりにして動転していると思われたのか、誰も相手してくれなかつた。警察はとにかく一刻